

-ly 派生語の成立条件について*

高橋 勝 忠

0. 序

-ly は -ness と同様に生産性の高い接尾辞である。Aronoff (1976 : 45) は、生産性の高い接尾辞の派生語は辞書¹ (lexicon) の中に記載する必要性はないという主旨のことを述べている。確かに我々が手にする辞書を見ても、網羅的に -ly や -ness の形が載せられているわけではない²。その理由は、-ly や -ness が比較的自由に形容詞の基体³ (base) に付加できるからであり、また、意味も合成的⁴ (compositional) に捉えられる結果、わざわざ辞書に載せる必要性はないということからであろう。もちろん紙面の都合ということもある。しかし、基体が形容詞であればどんな場合でも -ly や -ness が無条件に付加できるわけではない (e. g. *youngish* → **youngishly*, **youngishness*. vs. *bookish* → *bookishly*, *bookishness*. *eatable* → **eatably*, **eatableness*, vs. *readable* → *readably*, *readableness*)。従って、どのような場合にこれらの派生が可能かどうかを前もって知っておくことが重要であり、また辞書の情報としても必要なことである。本稿ではこのような目的に少しでも近づくために、-ly 派生

*-ly には形容詞と副詞の形がある (e. g. *manly* と *mannishly*)。本稿では副詞の -ly 派生語を取り上げる。なお、本文では形容詞の -ly について言及する場合を除き、単に -ly として副詞を表すことにする。

- 1 厳密には形態論の枠組みにおける辞書で我々の使う辞書とは異なる。
- 2 ただし、OED (The Oxford English Dictionary) は例外。
- 3 接辞付加を受ける単位のこと。
- 4 派生語全体の意味が内部構造単位で理解できること。

語の成立条件について内部構造を頼りに考えて行くことにする。

1. -ly の下位範疇化

-ly 派生語の内部構造を見る前に、接辞付加と係わりのある下位範疇化について少し触れておくことにする。接辞がどのような範疇 (=品詞) を基体にするかを規定したものを下位範疇化 (subcategorization) と呼ぶ。-ly は形容詞を基体にするので下位範疇化は次のように規定できる。

(1) -ly: [+A__]

しかし、厳密に言うと、形容詞の基体は -ly に直接隣接していなければならないことがわかる。

(2) a. *freely* vs. **freedomly*

b. *darkly* vs. **darkenly*

また、-ly が形容詞の基体に直接隣接していても、その形容詞が主要部 (head) としての機能を果さない場合は -ly の派生は阻止される。

(3) **enrichly*, **outsmartly*

これらの事実を踏まえるには、(1) に (4) のような付帯条件を加える必要があるであろう (Adv は -ly 付加後の範疇を示す)。

(4) -ly: Adv. [+A__] (A は主要部)

5 Williams (1981) に従い、主要部 (品詞を決定するもの) は派生語の右側に現れると仮定する。ただし、en- や out- は例外的に左側に主要部がある。

2. -ly 派生語の内部構造

本節では、-ly 派生語の可能な内部構造を抽出するために、Walker (1983) の “Rhyming Dictionary of the English Language” に記載されている派生語の内部構造パターンを詳細に調べることにする。Walker (1983: 478-506) によると、可能な内部構造パターンは 26 通りあり、これを生産性の高い順に並べると次のようになる。(括弧内の各数字は、Walker の辞書から派生語の総数を筆者が計算したもの)

- (5) a. X—ically (403)
 b. X—ously (388)
 c. X—ally (251)
 d. X—ably (240)
 e. X—ily (207)
 f. X—ingly (204)
 g. X—ively (181)
 h. X—ently (156)
 i. X—fully (122)
 j. X—ially (103)
 k. X—ately (92)
 l. X—lessly (92)
 m. X—antly (89)
 n. X—edly (86)
 o. X—atively (81)
 p. X—ishly (79)
 q. X—ibly (73)
 r. X—arily (37)
 s. X—ually (30)
 t. X—somenly (26)

- u. X-orily (19)
- v. X-lily (13)
- w. X-wardly (10)
- x. X-ilely (9)
- y. X-esquely (4)
- z. X-ianly (2)

次に、各派生語の具体例を X の範疇 (i.e. N, A, V, Adv, Stem⁶) に分けて見てみよう。また、X の範疇の該当する具体例が見当たらない場合は、星印(*)を付けておくことにする。

- (6) a. N-ically: *economically*⁷
 A-ically: *
 V-ically: *
 Adv-ically: *
 Stem-ically: *clerically*
- b. N-ously: *synonymously*
 A-ously: *
 V-ously: *
 Adv-ously: *
 Stem-ously: *curiously*
- c. N-ally: *educationally*

6 厳密に言うと、Stem (語幹) は非語彙的範疇となる。従って、-ly の基体が非派生語と同じ資格を持つ。

7 -ic に直接 -ly は付加できない。Jespersen (1942: 410) によると、唯一付加できるのは、*publicly* で、その他の語は -ic の代わりに -ical の代用形が充てられる。Walker (1983) の辞書には、*publicly* に加えて (*im*)*politically*, *frantically* の語が載せられている。

	A-ally:	*
	V-ally:	*
	Adv-ally:	*
	Stem-ally:	<i>locally</i>
d .	N-ably:	<i>fashionably</i>
	A-ably:	*
	V-ably:	<i>presumably</i>
	Adv-ably:	*
	Stem-ably:	<i>probably</i>
e .	N-ily:	<i>speedily</i>
	A-ily:	<i>duskily</i>
	V-ily:	<i>snappily</i>
	Adv-ily:	*
	Stem-ily:	<i>cosily</i>
f .	N-ingly:	*
	A-ingly:	*
	V-ingly:	<i>knowingly</i>
	Adv-ingly:	*
	Stem-ingly:	*
g .	N-ively:	<i>instinctively</i>
	A-ively:	*
	V-ively:	<i>impressively</i>
	Adv-ively:	*
	Stem-ively:	*
h .	N-ently:	*
	A-ently:	*
	V-ently:	<i>dependently</i>
	Adv-ently:	*

- Stem—ently: *anciently*
- i . N—fully: *peacefully*
 A—fully: *direfully*
 V—fully: *forgetfully*
 Adv—fully: *
- Stem—fully: *
- j . N—ially: *adverbially*
 A—ially: *
 V—ially: *
 Adv—ially: *
- Stem—ially: *especially*
- k . N—ately: *passionately*
 A—ately: *
 V—ately: *
 Adv—ately: *
- Stem—ately: *innately*
- l . N—lessly: *thoughtlessly*
 A—lessly: *
 V—lessly: *tirelessly*
 Adv—lessly: *
 Stem—lessly: *
- m . N—antly: *
 A—antly: *
 V—antly: *accordantly*
 Adv—antly: *
- Stem—antly: *slantly*
- n . N—edly: *doggedly*
 A—edly: *

- V—edly: *decidedly*
Adv—edly: *
- Stem—edly: *sacredly*
- o. N—atively: *opinionatively*
A—atively: *
V—atively: *interpretatively*
Adv—atively: *
Stem—atively: *putatively*
- p. N—ishly: *friendishly*
A—ishly: *
V—ishly: *
Adv—ishly: *
Stem—ishly: *garishly*
- q. N—ibly: *sensibly*
A—ibly: *
V—ibly: *vendibly*
Adv—ibly: *
Stem—ibly: *(im)possibly*
- r. N—arily: *discretionarily*
A—arily: *
V—arily: *
Adv—arily: *
Stem—arily: *ordinarily*
- s. N—ually: *spiritually*
A—ually: *
V—ually: *
Adv—ually: *
Stem—ually: *mutually*

- t. N—somesly: *troublesomesly*
 A—somesly: *lightsomesly*
 V—somesly: *irksomesly*
 Adv—somesly: *
- Stem—somesly: *noisesomesly*
- u. N—orily: *
 A—orily: *
 V—orily: *introducorily*
 Adv—orily: *
 Stem—orily: *cursorily*
- v. N—lily: *manlily*
 A—lily: *kindlily*
 V—lily: *
 Adv—lily: *
 Stem—lily: *uglily*
- w. N—wardly: *
 A—wardly: *
 V—wardly: *
 Adv—wardly: *backwardly*⁸
 Stem—wardly: *awkwardly*
- x. N—ilely: *
 A—ilely: *
 V—ilely: *

8 このタイプの派生語は *inward(ly)*, *onward(ly)* が示すように X は副詞でなくて前置詞である可能性もある。しかし本稿では -ward が形容詞なので前置詞+形容詞として分析しないで副詞+形容詞として考える。実際のところ、*in*, *on* には副詞の用法もある。いずれにしても X に Adv を許すのはこの構造パターンに限られ、非常に生産性が低いと言える。

	Adv—ilely:	*
	Stem—ilely:	<i>agilely</i>
y.	N—esquely:	<i>picturesquely</i>
	A—esquely:	*
	V—esquely:	*
	Adv—esquely:	*
	Stem—esquely:	<i>grotesquely</i>
z.	N—ianly:	<i>Christianly</i>
	A—ianly:	*
	V—ianly:	*
	Adv—ianly:	*
	Stem—ianly:	<i>medianly</i>

(6 a)~(6 z) の結果を調べると、圧倒的に X が N のものも多く、次の 20 通りがこのパターンを許すことがわかる。

- (7) N—ically, N—ously, N—ally, N—ably,
 N—ily, N—ively, N—fully, N—ially,
 N—ately, N—lessly, N—edly, N—atively,
 N—ishly, N—ibly, N—arily, N—ually,
 N—somesly, N—lily, N—esquely, N—ianly,

次に、X が A の場合であるが数は N よりかなり少なく、次の 4 通りに見られる。

- (8) A—ily, A—fully, A—somesly, A—lily,

しかも、それぞれの派生語は (9) に示すように一部の語に限られ、生産性は

かなり低い⁹。

(9) A—ily: *duskily, hardily, rummily, scantily* の4語。
(cf. **greenily, *whiteily*)

A—fully: *direfully* のみ。

A—somely: *blithesomely, wearisomely, wholesomely* の3語。

A—lily: *cleanlily, kindly, lowlily* の3語。
(cf. **deadlily, *poorlily*)

X が V の場合は、生産性の高いもの、生産性が低いもの、動詞の異形態 (allomorph) に付くものと三つのタイプに分かれる。以下、順に見ていく。先ず、生産性の高いものを (10) で示す¹⁰。

(10) V—ably: *admirably, agreeably, laughably, movably, respectably, etc.*

V—ingly: *admiringly, consideringly, laughingly, movingly, promisingly, etc.*

V—edly: *admiredly, collectedly, pronouncedly, repeatedly, unitedly, etc.*

(10) のタイプはいずれも他動詞 (一部、自動詞も含む) に -able, -ing, -ed

9 Walker (1983) の辞書に載せているものを引用したが、さらに OED を引くと次の語が見つかった。A—somely: *lonesomely*. A—lily: *lonelily, sicklily*.

10 V—ably が V—ibly よりも派生数が多くなることは、X—ably (240 語) と X—ibly (73 語) の全体数の差から見ても大方、予想できることである。しかし、V—able の生産性は非常に高いと指摘されるものの (e. g. 竝木 (1987: 50))、V—ably が実際生産的かどうかは疑問である。何故なら、Walker (1983) に載せている a で始まる動詞の V—able パターン (e. g. *ascribable, absorbable, etc.*) を調べてみると 62 語あったが、37 語が V—ably パターンを許さなかったからである。

が付加されて形容詞になり、その後 -ly が付いたものと思われるが、容認されない語が多く見出される。

- (11) V—ably: **approachably*, **collectably*, **extinguishably*,
**obtainably*, **repeatably*, etc.
- V—ingly: **admittingly*, **collectingly*, **readingly*, **repeatingly*,
**respectingly*, etc.
- V—edly: **consideredly*, **laughedly*, **movedly*, **promisedly*,
**respectedly*, etc.

動詞がこれら三つの構造のどれを選択するかはすぐに決定できない問題である。何故なら *collect*, *repeat* は V—edly の構造しか許さないが、*move*, *laugh* は V—edly 以外の構造を許すということがあるからである。また、*admire* のようにいずれの構造も許す場合があるので話はさらに複雑になる。**admittingly*, **collectingly*, **respectingly*, **laughedly* の各語は -ly の基体が分詞形容詞¹¹ (participial adjective) でない理由に基づいて (4) の下位範疇化素性の違反として片付けることができるが、それ以外の (11) の派生語に関しては -ly の基体が派生形容詞として存在する語なので、-ly が許されない理由を別の角度から検討しなくてはならない。この問題は第三節で、再度論じることにして次に生産性の低い例を見てみよう¹²。

- (12) V—ily: *drowsily*, *floppily*, *perkily*, *scrimpily*, *slippily*,
snappily の 6 語。
- V—fully: *forgetfully*, *mournfully* の 2 語。

11 現在分詞と過去分詞が完全に形容詞化したもの。その特性については荒木、安井 (編) (1992: 988) を参照。

12 さらに OED の次の語を追加しておく。V—fully: *resentfully*. V—lessly: *fadelessly*.

V—lessly: *dauntlessly, tirelessly* の 2 語。

V—ibly: *controvertibly, convertibly, discernibly, flexibly, vendibly* の 5 語。

V—somesly: *cumbersomesly, irksomesly, tiresomesly* の 3 語。

このタイプの派生語は、いずれも動詞の原形を基準にして作られたものであるが、どのパターンも 10 語以内にとどまり、X が A の時と同様に生産性はかなり低いと言える。また現在では、このタイプの派生は進んでいないようである。例えば、Jespersen (1942: 215) が挙げている X—y の動詞由来形容詞 (i. e. *catchy, choky, drowsy, quaky, quavery, shivery, slippy, swimmy, twiddly*) を調べて見ると、*drowsily* と *slippily* を除いて V—ily の派生は見つからなかった。このタイプの派生語の例が少ないもう一つの理由は、-ly の基体自体の派生が現在ではそれほど活発ではないことに起因する。例えば、-ful, -less の派生を考えてみよう。動詞にこれらの接辞が付加できるようになったのは Jespersen (1942: 419-420) によると ME の時期らしい。OE の時代には、これらの接辞はもっぱら名詞に付加したのである。ところが、ME の時代に入って名詞と同形の動詞が現れ、両者の区別が出来なくなった。結果として、動詞にも -ful や -less が付加できるとの類推が働いたようである。今日では廃語となっているが、**assistful* や **imagineless* がその当時の文献に現れるのは今のような事情があるからである。このように歴史的事実として X が V の時代があり、現代においても少数のものにその影が見られるが、本質的には X が N の本来の姿のものが多く残されているということかもしれない¹³。最後に動詞の異形態の例を見てみよう。

(13) V—ably: *communicably, separably*

13 実際のところ、Walker (1983) の辞書には N—ily が約 150 語、N—fully が 119 語、N—lessly が 90 語、N—ibly が 34 語、N—somesly が 13 語、載せられている。

- (communicate) (separate)
- V—ibly: *admissibly, defensibly*
(admit) (defend)
- V—ively: *extensively, presumptively*
(extend) (presume)
- V—atively: *appreciatively, significatively*
(appreciate) (signify)
- V—orily: *provisorily, satisfactorily*
(provide) (satisfy)
- V—ently: *coincidently, correspondently*
(coincide) (correspond)
- V—antly: *hesitantly, tolerantly*
(hesitate) (tolerate)

Aronoff (1976) は V—able と V—ant の派生に関して -ate の切り取り規則 (truncation rule) を、V—ible, V—ive, V—ative の派生に関して異形態規則 (allomorphy rule) を仮定している。従って、(13) のすべての例を異形態と呼ぶのは Aronoff の概念としては正しくない。そこで、本稿は (13) の括弧に示された動詞の原形とは異なる形で派生された語の意味で「異形態」を使うことにする。高橋 (1993) は、-(at)ion 付加の際に見られる動詞の形態的・意味的類似性に着目し、動詞の形を Aronoff のように異形態規則によって調整するのではなくて、名詞範疇化後、-(at)ion 切り取りによって導く方法を提案した (e. g. *admission* - *ion* + *ible* = *admissible*)¹⁴。このように (13) の派生を切り取り規則一本化によって導く方法が妥当であるかどうかはさらに検討の余地が残るが、(13) の派生が (12) の派生と比べてかなり生産性が高

14 V—ently, V—antly の派生に関しては -ence (cy), -ance (cy) の切り取りを仮定することが必要になるであろう。高橋 (1993: 294) 参照。

いこと、(7) の派生語パターンが一番多いことを考え併せると、Aronoff のように動詞の異形態規則として分析するよりも切り取りを仮定して、X を N として統一的に分析する方が妥当であるように思われる。何故なら、動詞の異形態規則による分析では、X を V として分析するので、(12) と (13) の生産性の違いが説明できないことに加えて、動詞の「異形態」を接辞ごとに定めるという一般性を欠いた記述をしなければならないからである。切り取り規則一本化によってこれらの問題が一挙に解決できるなら望ましい方向である。

本節では、-ly 派生語の可能な内部構造の仕組を 26 通り ((5) 参照) に分けて詳細に見てきた。-ly の基体は形容詞 (A) であるから、この 26 通りの構造パターンは総合すると X-A-ly に属することになる。本節での分析結果をまとめると、X-A-ly の内訳として、N-A-ly が一番多く 23 通り ((7) と (13) での考察参照)、それに対して A-A-ly は 4 通り ((8) と (9) 参照)、V-A-ly は 8 通り¹⁵ ((10) と (12) 参照) となる。

3. -ly 派生語の成立条件について

派生語は自由に生成されるのではない。一定の条件に基づいて生成される。例えば、-ly に関して言えば、(4) は -ly に個別に与えられる統語条件である。その他に、-lily や -ilely の連鎖を避ける音韻的な制約も -ly に課される個別の条件と考えられる (Katamba (1993: 75), Jespersen (1942: 410) 参照)。それとは対照的に、派生語形成全体に渡って可能な語と不可能な語を予測できる一般条件がある。Siegel (1974), Allen (1978) 等によるレベル順序付けの仮説 (Level Ordered Hypothesis; 以降、LOH と呼ぶ) や高橋 (1992 a), (1992 b) の名詞範疇条件 (Noun Category Condition; 以降、NCC と呼ぶ)、形容詞範疇条件 (Adjective Category Condition; 以降、ACC と呼ぶ) がそれ

15 V-ful-ly の派生は高橋 (1992 a) の分析に従うと、N-ful-ly から導かれる。この分析を採用すると V-A-ly の構造は 7 通りになる。詳細は、高橋 (1992 a: 71-72) を参照。

level-headedly, single-mindedly,

(Allen 1978 : 242)

Allen (1978 : 239) は、(16) のような複合語は (15) と異なり語彙化した非合成的 (non-compositional) な意味をもつので、-ly が通常の語形成規則とは違った形で働き、複合語にも付加できるようになる (stretchable) と説明している。Allen の説明で欠けている点は、何故、語彙化すると -ly が付加できるようになるかである。LOH を生かすなら、語彙化することにより複合語のレベルが下降してレベル1かレベル2になることを指定することが必要であろう。LOH では説明できないもう一つの例として、オーダリング・パラドックス (ordering paradox) を生み出す (17) の派生を挙げておく¹⁷。(14), (15), (16), (17) に対して高橋 (1992 a), (1992 b) の NCC と ACC は統一的な見解を与えることが出来る。

(17) *inconceivably, inconsiderably,*
indescribably, inextinguishably,

高橋が提案した NCC と ACC は次のような条件である。

(18) NCC: 最終節点にある名詞範疇 (N) は、動詞 (V)、形容詞 (A)、名詞 (N) のいずれかの範疇により、二重に C 統御されてはならない。

ACC: 最終節点にある形容詞範疇 (A) は、動詞 (V)、形容詞 (A)、副詞 (Adv) のいずれかの範疇により、二重に C 統御されてはならない。

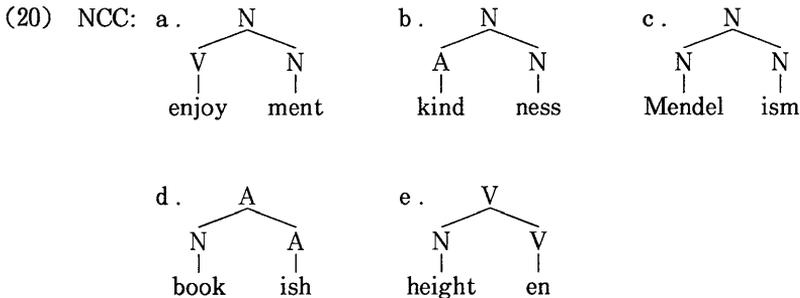
17 オーダリング・パラドックスのその他の例と、解決案に対する難点を指摘したものとして荒木 (1989) がある。

NCC と ACC を仮定する根拠や形態部門における位置付けについてはここでは立ち入らず¹⁸、(18) が意図する構造的に可能な派生と不可能な派生を示すことにする。(18) の条件は、(19) の構造も含意していると考える。

(19) NCC: 最終節点にある名詞範疇 (N) は、動詞 (V)、形容詞 (A)、名詞 (N) のいずれかの範疇により C 統御されなければならない。

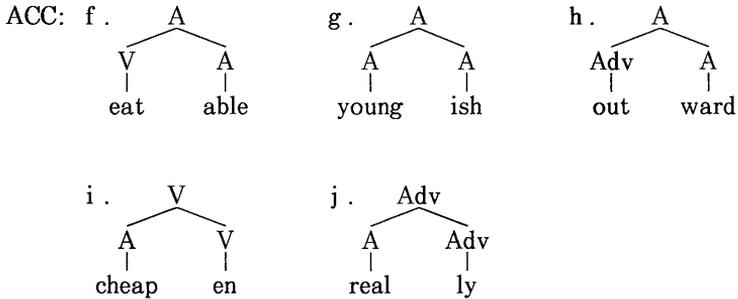
ACC: 最終節点にある形容詞範疇 (A) は、動詞 (V)、形容詞 (A)、副詞 (Adv) のいずれかの範疇により C 統御されなければならない。

(19) は (20) のような内部構造をもつ派生語を生成することを規定したものである¹⁹。

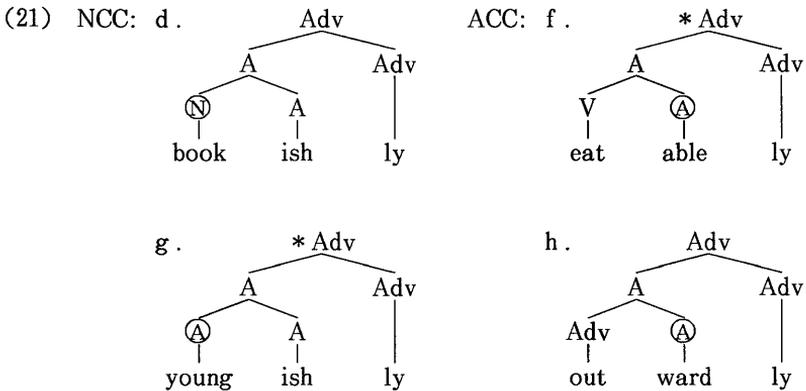


18 詳しくは、高橋 (1988)、(1992 a)、(1992 b)、(1993)、(1994) を参照のこと。

19 (20 c) と (20 g) の構造には最終節点の N と A が 2 つ現れる。どちらを最終節点に決めるかの問題があるが、本稿では意味内容にウエイトが置かれる *Mendel* と *young* を最終節点にする。実際のところ、どちらに決めてもこの問題は生じてこない。(21 g) で明らかになるが、*ish* を最終節点にしても ACC は正しく語の適格性を判断できる。



(20) の構造において -ly が付加できるのは基底が形容詞となる (d), (f), (g), (h) である。それぞれに -ly を付加した構造を見てみよう。(* は、以降この派生語が存在しないことを示し、マルで囲んだ要素は NCC と ACC における最終節点の N と A を指す。)



NCC と ACC は、派生構造において下位範疇化を満たしながら循環的²⁰ (cyclically) に適用されると仮定する。ただし、各サイクルの終りに Kiparsky

20 Pesetsky (1985: 220) 参照。

(1983)の言う角括弧表示削除 (bracketing erasure) が義務的に適用されないと仮定する。このことは、角括弧表示を各サイクルにおける内部構造に等しいと考えるなら、上のサイクルに進んだ後でも前のサイクルの内部構造に言及できることを意味する²¹。それでは、(21)の各構造に対してどのように(18)のNCCとACCが係わるか、具体的に検討して見よう。

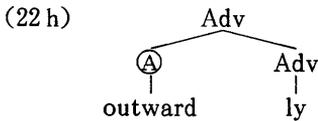
(21)のマルで囲んだ要素から明らかであるが、(21 d)ではNCCが、(21 f, g, h)ではACCが、適用される。いずれの構造も、第1サイクルにおいては(18)の条件は適用されない。この段階で派生を止めるなら(19)によって(20 d, f, g, h)の語が生成される。-ly付加を行う第2サイクルに進んでみよう。(21 d)では、マルで囲んだ名詞範疇(N)がA (*ish*)とAdv (*ly*)により二重にC統御されるが、(18)のNCCには抵触しない。何故なら、Advは派生を排除する統御子 (commander) になれないからである。従って、*book-ishly*の派生が正しく生成されることになる。次に、(21 f, g, h)の構造を考えてみよう。いずれの構造もマルで囲んだ形容詞範疇(A)はV (*eat*), A (*ish*), Adv (*out, ly*)により二重にC統御される。従って、(18)のACCにより(21 f, g, h)の派生は排除される。しかし、実際は、*outwardly*の語が存在するため矛盾が生じてくる。(21 h)の矛盾を回避する方法として、次に派生語の語彙化 (lexicalization) と内部構造の変換との関連性について考えてみよう。

高橋 (1992 b) では語彙化が生じる過程として、1) 強勢の移動が生じる場合 (e. g. *compâtable* (比較できる) → *cómparable* (等しい))、2) 切り取りが生じる場合 (e. g. *toleratable* (我慢できる) → *tolerable* (まあまあ))、3) 音韻的、形態的変化を伴わないで語彙化が生じる場合 (e. g. *readable* (読

21 分析の仕方は全く異なるが、このようなサイクルの見方を Fabb は示唆している。Fabb (1988 : 533) は内的角弧表示 (internal brackets) は、すべての派生段階において見えて (visible) いなければならないと主張するが、我々の分析では各サイクルにおける内部構造の語彙化によりその表示が削除されることも射程に入れている点が Fabb と異なる。

むことができる) → readable (読んで面白い) の3通りの可能性を提示し、内部構造がどのように変換されるかを示した。本稿でも、語彙化はこのような過程によって生じることを前提に、議論を進めることにする²²。

さて、(21 h) の構造に戻り、内部構造がどのように語彙化して変換するのを見てみよう。outward は「外へ向かう」という意味と語彙化した「見せかけの、表面上の」という意味がある。従って、-ly 付加の前段階 (第1 サイクル) で (22 h) のように語彙化していると考えられる。



outwardly も「外へ向かって」、「見せかけに、表面上は」の意味があり、outward の意味を継承したと考えられる。(22 h) の語彙化は音韻的、形態的変化を伴わない3)のタイプの語彙化に属すると思われるが、(22 h) は ACC に抵触しないで正しく outwardly を派生させることができる。同様に、bookishly の派生も bookish (本に関する、学者ぶった) の意味を考えると -ly 付加の前段階で (22 h) の内部構造のように変換するものと思われる。実際、語彙化の度合は、(21 d) の -ly の基体の構造 (N-A) が完全に語彙化して (22 h) の構造のように非派生語になっているものから (e.g. handsome, homeless)、語彙化しているとは思えないものまで (e.g. foolish, doubtful) 様々である。語彙化すればするほど内部構造の不透明さは増すものの、どの段階で内部構造が完全に削除されるのか明確な答えは出せないように思われる。いずれにして

22 強勢の移動や切り取りは語彙化を生じさせる一般の傾向であることは間違いないが、それらを伴うことにより必ず非合成的な意味が出てくるかといえば、そうでない場合も含まれる (e.g. educatable (教育できる) → educable (= educatable))。しかし、強勢の移動や切り取りは、このような場合も含めて内部構造変換の必要条件であると仮定する。

も、(21 d), (22 h) の構造は、NCC や ACC に抵触しないので、-ly の構造が語彙化したものからそうでないものまで広範囲に派生語を生成させることが可能となる。大変興味深いことは、NCC や ACC の (21 d, f, g, h) の構造に対するここでの予測が、前に見た (14) の分析結果を正しく認識する点である。すなわち、(21 d) の N—A—ly の生産性が高く、(21 f, g, h) の V—A—ly, A—A—ly, Adv—A—ly の生産性が低いのは、NCC が (21 d) の構造を排除せず ACC が (21 f, g, h) の構造を排除するという帰結から導かれるように思われる。従って、(21 f, g, h) の構造でありながら許される (9), (10), (12) の派生は、第 1 サイクルにおいて (22 h) のように語彙化するか、第 2 サイクルにおいて語彙化することが予測される²³。一方、許されない (9), (11) の派生はどのサイクルにおいても語彙化しないことが予測される。これらの予測が正しいかどうか確かめて見よう。(第 1 サイクルにおいて語彙化したと考えられる意味をイタリックで示している。)

- | | |
|--|-------------------------------------|
| (23) A—ily | * A—ily |
| <i> dusky</i> (薄暗い、憂鬱な、黒人の) | <i> greeny</i> (緑がかった) |
| <i> hardy</i> (頑丈な、大胆な、ずうずうしい) | <i> whitey</i> (やや白い) ²⁴ |
| <i> rummy</i> (妙な、危険な、ごろつきの) | |
| <i> scanty</i> (不十分な、けちけちする) | |
| (24) A—fully | |
| <i> direful</i> (恐ろしい、悲惨な) ²⁵ | |

23 例えば、*increasing* (増加する) から *increasingly* (ますます、いよいよ) のように、-ly 付加が適用される第 2 サイクルにおいての語彙化がある。

24 *whitey* には名詞で「白人、白人社会」の語彙化した意味がある。しかし、名詞は -ly の基体にはなれない。

25 *dire* にも *direful* と同じ意味があり語彙化しているとは思えない。OED には *direfully* を N—A—ly として分析する可能性も示されている。もしそうであるなら、(21 d) の構造分析が可能となり、NCC が正しくこの語の適格性を予測する。

(25) *A-somely*blithesome (楽しそうな、陽気な) (cf. blithe (楽しそうな))²⁶wearisome (疲れさせる、退屈な) (cf. weary (疲れた、退屈な))²⁷wholesome (健康によい、有益な) (cf. whole (無傷の、完全な))²⁸(26) *A-lily** *A-lily*²⁹

cleanly (清潔な)

deadly (致命的な、耐え難い)

kindly (思いやりのある)

poorly (病身の、気分がすぐれない)

lowly (みすばらしい、謙遜な)

(27) *V-ably** *V-ably*

admirable (見事な)

approachable (接近できる)³⁰

agreeable (愛想のよい)

collectable (集められる)

laughable (ばかげた)

extinguishable (消火できる)

movable (年々変わる)

obtainable (入手可能な)

respectable (かなりの)

repeatable (繰り返すことができる)

(28) *V-ingly** *V-ingly*

admiring (ほれほれした)

reading (読むための)

26 *blithe* には名詞と動詞の用法もあったが今では使われていない。しかし、*blitheful* の派生に関して、*N-ful* の可能性も OED は示唆している。もし、*N-some* の分析が可能なら語彙化していなくても問題にならない。

27 *wearisome* には *V-some* の分析も可能である。

28 *whole* にある「病気が直る」の意味は古語的用法である。興味あるのは、*wholesome* にあった「健康によい」の意味が *-ly* 付加の段階でまれにしか使われなくなっている点である。

29 *deadly*, *poorly* とともにイタリックが示すように語彙化していると考えられる。しかし、*A-lily* の形は存在しないので、我々の分析にとって問題となる。副詞形が存在しないのは、*-lily* の音韻的制約によるのかもしれない。あるいは、*deadly*, *poorly* に副詞の意味があるのでさらに *-ly* を付加する必要がないということかもしれない。

30 *approachale* には「すぐ親しめる」という語彙化した意味があるが *approach* の「近づく」の意味から予測できないこともないので内部構造が変換するほど語彙化は進んでいないと考える。

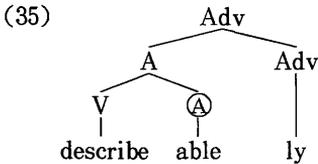
(23)~(33) の分析結果から、我々の予測に反する派生語は、偶然意味が同じとなるが、*wearisome* と *irksome* の 2 語と、V-ible の *controvertible*, *convertible*, *discernible* の 3 語である。これ以外の派生語に関しては上での分析が正しいことを示している。-ly は語彙化とは無関係に N-A の内部構造に自由に付加できることを前にも述べたが、(15) のように N-A の構造をもちながら複合語の後には -ly は何故、付加されないのでしょうか。それは、派生 (derivation) の後に屈折 (inflection) 形成が順序付けられよう、複合語形成は派生語形成の後に順序付けられることの違反による。従って、派生接辞のように見える -like も歴史的には複合語であり、今でも (16) のように語彙化した意味がないので -ly 付加は出来ないことが予測されるが、これも同じ順序付けの違反によるものと思われる。

- (34) **godlikely*, **wifelikely*, **kinglikely*,
**deathlikely*, **ladylikely*, **childlikely*

複合語が句レベルと異なる大きな違いの一つに意味が語彙化しているかどうかということが挙げられる。例えば、*blackboard* (黒板) に対し、*black board* (黒い板) は合成的に捉えられる。(15) や (34) の -ly の内部構造は、複合語と言うよりも句レベルに近い意味をもっているのが原因しているのかもしれない。しかし、(15) や (34) の内部構造も慣用化し、(16) のように非合成的な意味をもつなら (22 h) のように再分析される可能性は残されていると思われる。例えば、*manlike* には「男性的な」の意味以外に *manful* のように語彙化した意味、すなわち「勇敢な」を持ち併せているため *manlikely* が可能となる。

最後に、(17) のオーダーリング・パラドックスの例を見てみよう。荒木 (1989) の分析によると、*conceivable* や *describable* の語は多用化されることにより語根化したものと仮定している。語根化すると内部構造が見えなくなり非派生語と同じ資格になると考えられるが、服部 (1991) が指摘するように、語根化

はやや行き過ぎであるように思われる。もし、どちらの語も非派生語のように語根化すると仮定するなら、我々の分析ではさらに -ly を付加することが可能であると予測されるが、*conceivably* は派生されるものの **describably* は不適格となる。-ly 付加の前の両語の意味を考えると、*conceivable* は「想像できる、ありそうな」で、*describable* は「描写できる」となり、前者は語彙化した意味をもつが、後者は -able の基体の意味を継承している。-able がレベル1であれレベル2であれ、-ly や -ness がレベル2に属する限り、LOH は **describably*, **describability* の派生を誤って派生させることになる。我々の分析では、*describably* の派生が不適格になるのは、第1サイクルでも第2サイクルでも語彙化しないことによる (18) の ACC 違反として片付けられる。

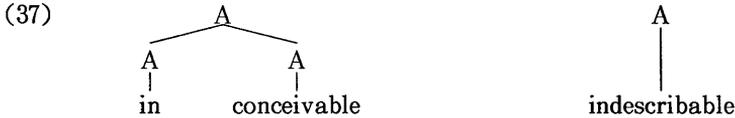


一方、*conceivably* の派生は第1サイクルの段階で語彙化し、第2サイクルの段階でも語彙化すると考えられるので最終的には (36) のような構造に変換する。実際のところ、*conceivably* に「多分、どうしても」の意味が出てくることから、この分析は正しいものと思われる。



in- 付加を行う場合は、面白いことに -ly 付加と逆の語彙化をしていることに気付く。すなわち、*inconceivable* は「想像もつかない、ありえない」の意味で *conceivable* の意味を継承しているが、*indescribable* は新たに「言葉に絶

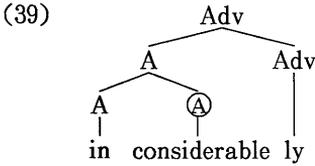
する」の語彙化した意味が生じる。構造的に両語の違いを見ると次のようになる。



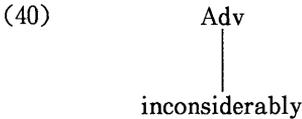
さらに、-ly 付加を行うと *inconceivably* は「要領を得ない」のように意味が誇張され、語彙化するものと考えられる。*indescribably* は「言葉に絶するほどに、言葉で言い表わせないほどに」となり *indescribable* の意味を継承したと考えられる。構造的に両語の意味の違いが次のように反映される。



(36), (37), (38) の構造は (18) の ACC に抵触しないので、いずれの派生も正しく生成することができる。*extinguishable* も **extinguishably* の副詞形はないが、*inextinguishable* や *inextinguishably* の形は存在する。従って、*describable* と同様に、in- 付加の段階で語彙化が生じたと予測される。実際のところ、*extinguishable* には「消火できる」の意味しかないが *inextinguishable* には「(感情が) 押さえ切れない」の意味もプラスされているのでこの予測は正しいものと思われる。*inconsiderably* の派生は、*considerable* に「重要な、かなりの」の意味があることから -able の付加の段階で語彙化していると考えられる。しかし、in- 付加の段階で「わずかの、重要でない」の意味しかないので -ly 付加による語彙化を期待するのである。何故なら、もし語彙化しないなら次のような構造になり (18) の ACC により排除されるからである。



しかし、*inconsiderably* には「わずかに」の意味しかなく、-ly 付加の段階で語彙化は生じていないと考えられる。結果として、我々の分析では誤って *inconsiderably* を排除することになる。OED を引くと *inconsiderably* には今ではまれだが、「軽率に」の語彙化した意味があったようである。従って、(40) の内部構造を形成したもののその意味は廃れたと仮定できるかもしれない。



本節では、-ly 派生語の成立条件を求めるために次の3つのことを検討してきた。(14) の N—A—ly パターンが多くなり、V—A—ly と A—A—ly は何故少なくなるのか。(16) のような複合語に -ly は何故付加できるのか。(17) のオーダーリング・パラドックスを引き起こす派生語に -ly が付加できたりできなくなるのは何故か。これらの疑問に対して (18) の NCC と ACC は統一的な説明を与えることが可能である。LOH の立場では辞書の段階で接辞のレベルが固定される結果、意味を反映しないことになる。意味は時代とともに当然、変遷していくものと考えられるので接辞のレベルもそれに従い、変化するものと思われる。しかし、その度ごとにレベルを下降させたり、再分析を行うなら、元の辞書で指定した接辞のレベルとの関係が見失われるように思われる。何故なら、やがて意味が定着して語彙化した段階で非派生語となり、元の接辞のレベルとは全く無関係になるからである。

本稿では -ly 派生語の内部構造を通して、-ly の成立条件を見てきた。また、

語彙化によって内部構造が変換される過程と -ly の関係を見てきた。いずれも、NCC と ACC の帰結として導かれるように思われる。

References

辞典

OED=*The Oxford English Dictionary*, prepared by J. A. Simpson and E. S. C. Weiner. Second edition. Oxford: Clarendon Press. 1989.

RHD=*The Random House Dictionary of the English Language*, ed. by S. B. Flexner. Second edition. New York: Random House. 1987.

Allen, M. 1978. *Morphological Investigations*. Ph. D. dissertation, University of Connecticut.

荒木一雄. 1989. 「オーダリング・パラドックスについて」『相愛大学研究論集』第5巻. 83-97.

荒木一雄. 安井稔(編) 1992. 『現代英文法辞典』東京: 三省堂.

Aronoff, M. 1976. *Word Formation in Generative Grammar*. MIT Press.

Fabb, N. 1988. "English suffixation is constrained only by selectional restrictions." In *Natural Language and Linguistic Theory* 6. 527-539.

服部義弘. 1991. 「語構造のパラドックスと慣用化」『英語学論説資料』第25号(平成3年分)第1分冊. 617-625. 東京: 英語学論説資料保存会.

Jespersen, O. 1942. *A Modern English Grammar on Historical Principles*. Part VI. London: George Allen & Unwin.

Katamba, F. 1993. *Morphology*. London: Macmillan.

Kiparsky, P. 1983. "Word-formation and the lexicon." In F. Ingemann (ed.) *Proceedings of the 1982 Mid-America Linguistics Conference*. 3-29 Lawrence, Kansas: University of Kansas.

竝木崇康. 1987. 「英語の接尾辞 -able」『茨城大学教育学部紀要』(人文・社会科学, 芸術) 36号. 47-64.

- Pesetsky, D. 1985. "Morphology and Logical Form." In *Linguistic Inquiry* 16. 193-246.
- Siegel, D. 1974. *Topics in English Morphology*. Ph. D. dissertation, MIT.
- 高橋勝忠. 1988. 「英文法指導における『何故』の解明—その3語形成」『福岡大学総合研究所報』第103号. 33-37.
- 高橋勝忠. 1992a 「語形成における名詞範疇条件」『英文学論叢』第35号. 53-75. (京都女子大学英文学会)
- Takahashi, K. 1992b. "Adjective Category Condition in Word Formation." In *Proceedings of the 5th summer conference 1991 Tokyo Linguistics Forum (TLF5)*. 181-194.
- 高橋勝忠. 1993. 「語形成における切り取り規則」『言語学からの眺望』(福岡言語学研究会編) 285-297. 九州大学出版会.
- 高橋勝忠. 1994. 「英語の派生語形成に見られる一般性」『ことばの音と形』(枘矢好弘教授還暦記念論文集刊行会編) 191-202. 東京: こびあん書房.
- Walker, J. 1983. *Rhyming Dictionary of the English Language*. Routledge & Kegan Paul. New edition with supplement compiled by Michael Freeman.
- Williams, E. 1981. "On the Notions 'Lexically Related' and 'Head of a Word'," In *Linguistic Inquiry* 12. 245-274.